

三菱ガス化学株式会社「個人投資家説明会」質疑応答要旨

日時 : 2025年1月25日(土) 15:00 ~ 15:40 (オンライン配信)

説明者 : CSR・IR部長 兼 IRグループマネージャー 滝澤 諭

(本資料に関する注意事項)

本資料については、上記説明会での質疑応答について、加筆・修正を加え、当社の判断で簡潔に纏めたものであることをご了承ください。また、説明会資料同様、記載されている計画、目標等の将来に関する記述は、説明会当日現在において当社が入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいて判断したものであり、不確実性を内包するものです。実際の業績等は、様々な要因によりこうした将来に関する記述とは大きく異なる可能性があります。

Q1: 為替や原燃料価格の感応度を教えてほしい。

A1: 為替感応度等については、1ドル当たり1円円安になると営業利益及び経常利益は各々年間約6億円増益になると試算。また、原油価格は1バレル当たり1USドルの下落で、年間約2.5億円の増益影響に。

Q2: 半導体関連事業でもポジティブな影響とネガティブな影響について教えてほしい。

A2: ポジティブな影響としては、生成AI関連製品などの先端分野における半導体需要が伸びており、当社の生成AIサーバー向け基板材料や高機能メモリ向けの洗浄薬液などがこれらの需要伸長の恩恵を受けている。一方、ネガティブな影響については、先端分野以外の汎用メモリやロジックなどの需要回復が全般的に遅れており、当社材料についてもこれらの用途向けの需要回復には当初の想定と比べてやや遅れが生じている。

Q3: 今期の上期には過去最高となる営業利益を達成したとのことだが、業績好調の主な要因は何か。

A3: 今上期においては、機能化学品事業部門の損益がエンジニアリングプラスチック事業や光学材料事業を中心に全般的に前年同期を上回ったほか、グリーン・エネルギー&ケミカル事業においても、メタノール事業やエネルギー資源・環境事業を中心に好調に推移したことなどが主な要因。

Q4: 数々の世界トップシェア製品を生み出しているとのことだが、いろいろな製品を作るには投資が必要なので、収益性が上がりにくい構造なのか。今後、どのようにROEやROICを改善していくのか。

A4: 2023年度のROEは6.1%となり、ROICについても3.3%に低下している。2023年度は半導体市場のダウンサイクルや世界経済の低迷の影響で需要がやや減退した一方で、ここ数年は成長投資を積極化しているフェーズであることもあり、資本収益性が低下したものと認識。今後の改善策としては、U&P事業に対する経営資源の一層の選択と集中や、これまで実行した大型投資の成果の着実な刈り取りなど、「事業ポートフォリオの強靭化」や「質を重視した経営への注力」により、ROEとROICの向上を図っていきたい。

Q5: 2026年度計画のROE9%以上、ROIC8%以上の目標数値が魅力的とはあまり感じないが、投資を必要とするメーカーの事業特性上やむをえないのか。例えば、もっと株主還元を積極化して、ROEを二桁以上にすることは考えられないのか。

A5: 現中計期間は前中計期間から引き続き、成長投資を積極化しているフェーズであり、ROE9%以上、ROIC8%以上の目標値としているが、U&P事業に対する経営資源の一層の選択と集中により事業ポートフォリオの強靭化を推し進め、更なるROE及びROICの向上を目指している。2030年のありたい姿では、ROE12%以上、ROIC10%以上を掲げており、ここ数年実施している成長投資を確りと刈り取れば達成できる水準と考えている。株主還元については、現中計においてより一層強化すべく、累進配当方針を採用し、総還元性向の目安の引き上げを行っている。

Q6: グリーン・エネルギー&ケミカル事業は、貴社の祖業であるメタノール生産からスタートしているようだが、その為メタノールを活用したカーボンニュートラルビジネスの最先端を走っているという理解でよいか。

A6: 当社グループは、従来型メタノールの製造技術・触媒技術をベースに環境循環型メタノールの製造技術を開発し、実証実験も完了して実用化の目途が立っている。また、長年にわたるメタノール事業の幅広い知見と経験を活かし、社内外の多くのパートナーとともに顧客の低炭素化をサポート出来ると考えている。

以上